

## 別れの詩の時間と空間

別離の悲哀は、古來中國の詩の主要な主題の一つであった。親しい者と別れる辛さは昔も今も變わらない。だからこそ千年以上も昔に作られた詩が、現在もなお私たちの胸を打つのである。しかしいくつかの時代を隔てた別れの詩をみると、その悲しみの表わし方は、時代によって大きく變化しているのではないかと思われる。本稿は漢代の古詩から唐詩（たし主として盛唐詩とする）までの範圍で、別離の悲哀がどのように表現されているか、その様式の變化をたどってみたいと思う。對象とするのは別離に際して作られた詩を中心に、征夫を思ふ妻の歌・望郷の歌など、空間的乖離を主題とするものを合せて考えたい。なお本稿は拙論「漢魏六朝詩における空間表現の形式とその變化——漢賦から唐詩まで——」（東洋文化研究所紀要 第百二冊、一九八七年、以下「拙論」と略す。）にもとづき、ここで提起した問題を、別れの詩という面から考えてみようとするものである。本稿で述べる變化の背景や要因に關しては、詳しくはこの稿を参照していただきたい。

古詩から唐詩までの別れの詩の流れには、大きく分けて次の三つの時期があるのではないかと思われる。

戸倉英美

- (1) 漢より魏まで
- (2) 西晋より宋まで
- (3) 齊より唐まで

このうち(3)の時期は、唐代に完成される別れの詩の一つの型が、しだいに形成されていく過程。(1)は、それとは異なる様式で別離の悲哀が表現されていた時代。(2)は(1)・(3)のような一定の型をもった別れの詩が存在しなかった時代である。つまり漢から唐へかけて、別れの詩には古詩型と唐詩型ともいべき異なる二つのタイプがあり、中間にその移行期があったということができるだろう。この流れをたどった後に、唐詩型の完成後にみられる新しい變化について考えたい。

まず古詩型と唐詩型の違いはどのようなものか。次の二つの作品を比較してみよう。

與蘇武

其一

良時不再至 良時 再びは至らず

離別在須臾 離別は須臾に在り

屏營衢路側 衢路の側に屏營し

執手野踟躕 手を執りて野に踟躕す

仰視浮雲馳 仰いで浮雲の馳するを視るに

奄忽互相險 奄忽として互に相險ゆ  
風波一失所 風波に一たび所を失えば  
各在天一隅 各々天の一隅に在り  
長當從此別 長く當に此從り別るべし  
且復立斯須 且く復た立ちて斯須せん  
欲因晨風發 晨風の發するに因りて  
送子以賤驅 子を送るに賤驅を以てせんと欲す

送友人

李白

青山橫北郭 青山 北郭に横たわり  
白水遶東城 白水 東城を遶る  
此地一爲別 此の地一たび別れを爲せば  
孤蓬萬里征 孤蓬 萬里を征く  
浮雲遊子意 浮雲 遊子の意  
落日故人情 落日 故人の情  
揮手自茲去 手を揮つて茲より去れば  
蕭蕭班馬鳴 蕭蕭として班馬鳴く

前者は李陵・蘇武の故事に假託されたもので、古詩における別離の悲哀を代表するもの、後者も唐代離別詩の代表といわれるものの一つである。この二つの詩を比べて氣づくことは、前者の別離の風景は、後者ほどに鮮明ではないということである。「山は青々として城の北に横たわり、水は白く輝いてまちの東をめぐる」、平明な敘述の中に、後者の風景は確かな遠近感をもって大きく廣がる。ここでは五・六句の「浮雲」と「白日」も、この景の中に實在し、それを一層擴大するとともに、別離の場にふさわしい情感を加えているのである。

別れの詩の時間と空間

それに對し李陵の詩では、「各々天の一隅に在り」という句はあつても、その隔たりの大きさは具體的に描かれてはいない。代わつてこの詩に描かれるのは流れてやまない時間である。「二人が共に過す楽しい時間はもう二度とめぐつては來ないだらう。しかも別れの時は目前に迫っている」、李白の詩が、別離の舞臺に山河の景を描いたところで、古詩はとどまることなく流れる時間を提示する。この詩の中では「浮雲」も李白の詩の中のように、大きな空間をあてもなくさまようものではない。たちまちのうちに後になり先になりして去っていくと、時間とともに變化してやまないものの姿で描かれるのである。李白の詩の友人たちは、空間の中を別れていく。作者が描き出そうとするのは、二人が別れるその時その場の情景であり、悲しみは、こんなにも大きな世界の中に、離れ離れになつていくという形で表現される。一方古詩の友人たちは、時間の中を別れていく。悲しみをもたらずのは、隔たりの大きさそのものではなく、萬物を變化させ自分たちを別離という事態へ追い込んでいく時間であり、「長く當に此從り別るべし」とうたわれるように、これから先會えないままに流れていく時間なのである。

別離の悲哀を、流れ去る時間の中で表現するか、それも空間の描寫によつて表わすか、これが古詩と唐詩にみられる違いである。古詩では他に、親しい者との乖離の悲哀がどのようにうたわれているかをみてみると、

嘉會難再遇 嘉會 再びは會い難く  
三載爲千秋 三載も千秋と爲らん(與蘇武)其二

思君令人老 君を思えば人をして老いしむ

一一五

歲月忽已晚 歲月は忽ちにして已に晩る（古詩十九首其一）

歡娛在今夕 歡娛 今夕に在り

嬾婉及良時 嬾婉 良時に及ばん（蘇武「詩」其三）

これらの句は、親しい者と別れて過す時間の辛さをうたい、だからこそ今この時を樂しもうとうたう。さらに「昔は鶴と鶯爲りしも、今は參と辰と爲る」（蘇武「詩」其二）と、過去と現在を對比して悲しみ、別離に際して「時に隨いて景光を愛せよ」（蘇武「詩」其四）と言葉を贈る。古詩の中ではすべての感情が過ぎ去る時間の中で把握され、時間に關わる表現は多彩を極める。だがそこには、私たちが唐詩で親しんでいるような山河の景を見出すことはできないのである。一方唐詩は、

別董大 高適

十里黃雲白日曛 十里黃雲 白日曛ず

北風吹雁雪紛紛 北風 雁を吹いて雪紛紛たり

莫愁前路無知己 愁うる莫れ 前路に知己無きを

天下誰人不識君 天下 誰人か君を識らざらん

臨高臺 王維

相送臨高臺 相送りて高臺に臨めば

川原杳何極 川原 杳として何ぞ極まらん

日暮飛鳥還 日暮 飛鳥還り

行人去不息 行人 去って息まず

このように唐代の別離は常に鮮明な風景をもち、廣大な天地を舞臺に繰り廣げられる。様々に工夫をこらして描き出される風景は、友との隔たりの大きさを、旅の不安を表わすとともに、友を思ふ情の限り

ないことを暗示するのである。だがこれらの詩の中には、流れ去る時間を嘆く言葉は見られない。先の李白の詩の中には「落日 故人の情」という句があった。ここには沈みゆく夕日を望んでこれまでの友情を回想し、名残りを惜しむ氣持が感じられる。だがこの句によってこの詩に導入される時間は、「良時 再びは至らず」と、還らないことを痛切に悲しむいとおしむものではない。過ぎ去った時間を、作者はむしろ穩やかに懐しむ。流れてやまない時間は、もはや唐人に大きな苦痛を與えないのである。

時間に對する古詩の嘆きはいつごろから始まるのだろうか。『詩經』の中では別離の悲哀も次のようにうたわれていた。

燕燕于飛 燕燕は于き飛ぶに

差池其羽 其の羽を差池にす

之子于歸 之の子の于き歸るを

遠送于野 遠く野に送る

瞻望弗及 瞻望するも及ばず

泣涕如雨 泣涕は雨の如し（邶風「燕燕」）

旅立つ人を送りに來た。その人はしだいに遠ざかり、とうとう姿も見えなくなつた。そのとき私は悲しくて、涙が雨のようにこぼれた、とうとうこの歌は、親しい者が自分のそばからいなくなるという悲しみを、最も素朴な形で表現しているといえるだろう。流れる時間は、まだまだまったく意識されていない。

『詩經』には他に「一日見されば、三歳の如し」（王風「采芣」）、「君子は役に于き、其の期を知らず、曷つか至らん哉」（王風「君子于役」）のように、この悲しみを時間の経過の中でうたっているものもある。しかしこれらの詩の中では、辛い時間は戀しい人と會えないという事

態によつて、一時的にもたらされるものにすぎない。時はすみやかに流れ去り、人は老いゆく、良き時は失なわれる。このように常に人間を苦しめ、人間の力では如何ともし難いものと認識される時間は『楚辭』に始まる。前述した拙論の第二章では小尾郊一・鈴木修次兩氏の論を引いたが、小南一郎氏の論稿「楚辭の時間意識」も、この問題を考察するものである。小南氏によれば『楚辭』九歌の諸篇の中には、時間を循環的・永却回歸的なものとみる意識から、直線的な流れて還らないものとみる意識への移行がみられるという。そして循環する聖なる時間の喪失を鋭く意識し、その意識を作品の中に定着しようと努力していることが、それまでの文藝にみられない『楚辭』の特徴であるという。

吉川幸次郎氏が「古詩十九首」に普遍的に現れる感情を、「人間が時間の上に生きることを意識することによって生れる悲哀の情」と述べているように、古詩の悲哀も直線的・不可逆的な時間の中に生きることから發している。友情を裏切られた辛さ、才を認められない悔しさ、古詩では様々な悲しみが「人生 金石に非ず、豈に能く長く壽考ならんや」(古詩十九首「其十一」)のように、時間に對する嘆きを導き出すのであり、別離の詩も例外ではないのである。『楚辭』の時代よりこのかた、人間はこの無情の時間の發見に心を奪われ、ただそのみを悲しんできたともいえるだろう。ここでは浮雲・落日などすべての自然の景物は、時間の中に存在するものとして觀察され、時間の流れを表現するために描かれる。それらを空間の中にあるものとして見、一つの風景を描き出そうとする態度は古詩にはない。このように時間の中のものだった別れが、背景に多種多様な風景をもち、空間の中のものとなるまでが、六朝離別詩の歩みである。

## 別れの詩の時間と空間

## 二

建安・正始の別れの詩は、先に第一の時期に分類したが、拙論三章・四章で述べたことと關連して分けて考える。拙論に述べたように、この頃の詩にはある顯著な風景がみられた。それは蕭條たる原野や大河を背景に、翹々として翻る鳥・蓬・小舟などを描いたものである。圖式的にいえば、原野は明らかに存在する事物のみ價值を見出していた世界、漢の崩壞を象徴するものであり、翹々として翻るのは、亂世にもてあそばされる者の像である。この圖は王粲によって提出され、曹植・阮籍を初めとする多くの詩人たちが、それぞれに變化を加えながら、その作品に描き出している。古詩の自然が、時の経過のすみやかなることを表わすだけのものだったのに對し、この原野や大河の圖は、空間を爲していることでは唐詩の自然と同じである。しかしこれは別離の情とは直接結びつかないのである。例えば曹植(一九二)二三(一)「送應氏」其一は次のようにうたわれる。

步登北邙坂	步して北邙の坂を登り
遙望洛陽山	遙かに洛陽の山を望む
洛陽何寂寞	洛陽 何ぞ寂寞たる
宮室盡燒焚	宮室 盡く燒焚せらる
垣牆皆頽擗	垣牆は皆頽擗し
荆棘上參天	荆棘は上天に參わる
不見舊耆老	舊耆老を見ず
但覩新少年	但だ新少年を觀るのみ
側足無行徑	足を側つるに行徑無く
荒疇不復田	荒疇 復た田せず

游子久不歸 游子 久しく歸らず

不識陌與阡 陌と阡とを識らず

中野何蕭條 中野 何ぞ蕭條たる

千里無人煙 千里 人煙無し

念我平常居 我が平常の居を念ひ

氣結不能言 氣結はれて言う能わず

宮殿は残らず燒き拂われ、いばらが茂り、見わたす限りの荒野に人家の煙もない。「與蘇武」の別離の場面は、ただ「衢路側」「野脚關」とのみあったのに比べれば、ここには明らかな輪郭をもった情景が描かれる。しかしこの詩は詩題を除き、應氏との別れに觸れてはいない。この寂しい情景も、唐詩でのように旅立つ友の背後に廣がっているものではなく、都洛陽の荒廢を描くものである。そして一篇はそれを望んで嘆くことに終始するのである。建安・正始の詩は、自然を空間として見ていながら、その描寫によって別離の悲哀を表現しようとはしていない。それは同じ詩の其二に至り、次のように傳統的な時間の嘆きでうたわれるのである。

清時難屢得 清時 屢しばは得難く

嘉會不可常 嘉會 常にはす可からず

天地無終極 天地 終極無く

人命若朝霜 人命 朝霜の如し

.....

山川阻且遠 山川 阻り且つ遠く

別促會日長 別れ促りて會日長し(「送應氏」其二)

このことは建安・正始の詩と唐詩との、空間に對する意識の違いを物語っていると見えるだろう。王粲・曹植らの詩の中で空間を爲して

廣がるのは、茫漠たる原野や濕地のように寂寥を極めたものばかりである。そして一方では公讌詩にみられるように、楽しむべき自然は奥行のない文様のような華麗さで描かれるのである。當時はまだ、唐詩のように自然のすべてを空間として捉える眼は存在しなかった。空間はただ空虚な恐しいものであり、確かな秩序を失った世界の姿として望まれ、描寫されるのみであった。「青山北郭」「十里黃雲」など、廣大な自然の景を描き分け、別離の悲哀をうたい上げる、このようなことを可能にするのは、空間の中にあることを苦痛としない意識である。建安・正始の空虚の中では、翻々として悲しみ感うよりほかに、人間にできることはない。そこでは元來別れという行爲すら、あり得なかつたのである。

不悲身遷移 身の遷移するを悲しまず

但惜歲月馳 但だ歲月の馳するを惜しむ

歲月無窮極 歲月 窮極無く

會合安可知 會合 安くんぞ知る可けん(徐幹「於清河見挽船士新婚與妻別」)

.....

變故在斯須 變故は斯須に在り

百年誰能持 百年 誰か能く持せん

離別永無會 離別せば永く會う無からん

執手將何時 手を執るは將た何れの時ぞ(曹植「贈白馬王彪」)

この時期別離は、空間の中のものとは把握されず、別離の悲哀は、過ぎ去る時間の嘆きとともにうたうべきものと考えられていた。しかし「贈白馬王彪」でも、異母弟と別れる作者の心は、このような言葉より曹植獨自の動きの描寫でより鮮烈に傳えられるのである。この時

代の感情を最もよく表現するのは、時間に關わる嘆きではなく、合せて「原野と翩翩の圖」というべきものである。古詩の型は保たれつつ、しだいに表現の力を失つて次の時期へ向かつていく。

### 三

次に西晋から宋までの離別詩について述べよう。この時期には古詩の安定したパターンが崩れ、唐詩への新しい歩みもまだ始まらず、様々なタイプの別れの詩が作られた。例えば孫楚（二九三）の「征西官屬送於陟陽候作」は、沈德潜が「送別の詩なるに、齊物を以て主と作す」（『古詩源』卷七）と評しているように、友との別れを述べるよりも、老莊の道を説くことに力がこめられているかに思えるものである。陟陽の宿驛まで見送ってくれた人々に向かい、次のような言葉が語られる。

三命皆有極 三命は皆極まり有り  
咄嗟安可保 咄嗟 安んぞ保つ可けん  
莫大於殤子 殤子よりも大しきは莫く  
彭聃猶爲天 彭聃も猶お天しと爲す  
吉凶如糾纏 吉凶は糾るる纏の如く  
憂喜相紛擾 憂喜は相いに紛として擾る  
天地爲我爐 天地は我が爐爲り  
萬物一何小 萬物は一に何ぞ小なる  
達人垂大觀 達人は大なる觀を垂し  
誠此苦不早 此を誠むるに早からざるを苦しむ  
「人間の壽命は相對的なもので、若死した者を長壽と考えることもでき、長命を保つた彭祖・老聃すら夭折とされることもある。吉凶・

### 別れの詩の時間と空間

憂喜は纏のようにもつれ合い辨別できない。そもそも天地は大きな爐のようなもので、一つ一つの存在はまことに小さなものにすぎない」。作者は『莊子』齊物論、「鵬鳥賦」などの言葉を用いて、人命のはかなさを嘆くことを戒める。このような詩が生れるのも、老莊思想の流行に加え、別離に際して「人命 朝霜の如し」（曹植「送應氏」其二）のように嘆くことが、一般的だったからといえるだろう。古詩のパターンをもとに作られた異色の作である。

次に潘岳（二四七～三〇〇）「金谷集作」は『文選』祖饌の部にわずか八首の一つとして掲げられ、また古今の様々な別離について書き列ねる江淹「別賦」も、事例の最初にこの作品が作られた金谷での別れをあげている。少なくとも六朝期には、金谷送客のエピソードとそれを描いた潘岳の詩が、別離の情緒を代表するものの一つと考えられていたのである。しかし現在この詩をみると、これがほんとうに別れの詩だろうかという思いすらしてくるのである。

金谷集作 潘岳  
王生和鼎實 王生は鼎實を和え  
石子鎮海沂 石子は海沂を鎮めんとす  
親友各言邁 親友 各々言に邁けば  
中心悵有違 中心 悵として違う有り  
何以斂離思 何を以てか離思を斂べん  
攜手游郊畿 手を携りて郊畿に遊ばんとす  
朝發晉京陽 朝に晉京の陽を發で  
夕次金谷湄 夕べに金谷の湄に次る  
迴谿繁曲阻 廻れる谿は曲がれる阻を繁り  
峻阪路威夷 峻しき阪は 路 威夷たり

綠池汎淡淡 綠の池は汎れて淡淡たり  
 青柳何依依 青き柳は何ぞ依依たる  
 濫泉龍鱗瀾 濫るる泉は龍の鱗のごと瀾あり  
 激波連珠揮 激しき波は連なる珠のごと揮ぐ  
 前庭樹沙棠 前庭には沙棠を樹え  
 後園植烏桺 後園には烏桺を植う  
 靈囿繁若榴 靈囿には 若榴 繁く  
 茂林列芳梨 茂林には 芳梨 列る  
 飲至臨華沼 飲の至りて華沼に臨み  
 遷坐登陸坻 坐を遷して陸坻に登る  
 玄醴染朱顏 玄醴もて朱き顔を染め  
 但懣杯行遲 但だ杯の行ること遲きを懣う  
 桴桴撫靈鼓 桴を揚げて靈鼓を撫てば  
 簫管清且悲 簫管は清く且つ悲しむ  
 春榮誰不慕 春榮 誰か慕わざる  
 歲寒良獨希 歲寒 良に獨り希なり  
 投分寄石友 分を投じて石友に寄す  
 白首同所歸 白首まで歸する所を同じうせん  
 王君は長安へ、石君は城陽へそれぞれ遠く旅立っていく。友との別れを思えば、悲しみに心は亂れる、と述べるところまではまちがいない。別れの詩である。「攜手游郊畿」の句も、「執手野踟躕」(與蘇武「其二」)、「携手上河梁」(與蘇武「其三」)、「握手一長嘆」(蘇武「詩」其三)など古詩に類似の表現がみられ、別離の悲哀の慣用的表現の一つである。しかし續いて送別の宴を張る石崇の別荘金谷園の描寫に至り、様相は古詩の別離から一變する。

この華麗な對句の連續が描くのも、李白・王維らの詩と同じく別れの景といふこともできるだろう。だがこれは唐詩のように、旅立っていく者の不安や、二人の間の越え難い距離を暗示するようなものではない。また李白が孟浩然と別れるときの詩に「煙花三月 揚州に下る」(「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」)とあつたように、華やかなものが却つて別れの悲しみを鋭く描き出しているのでもない。この美しく整つた自然は、人間の感情と無縁のものに感じられる。むろん古詩の自然のように、時間とともに變化する姿が捉えられているのでもなく、別離の情とはどう考えてもつながらない。これではただ、金谷園を贊美するだけの詩ではないかと思えてくるのである。

この詩は離別詩の代表というよりも、この時代の自然描寫を代表するものといふべきではないか。その描寫の特徴は、「龍鱗」「靈囿」「華沼」のように、一つ一つの事物を美しく飾り立てること、飾り立てた體言が大量に並べられるのに對し、動詞は「樹」「繁」「臨」のように動きの表現に乏しいこと、對偶の美を追究するあまり、「濫泉」「激波」の對のように、實際の波の動きは殆ど感じられないものになつてしまふこと、合わせて風景というよりも、自然を一枚の豪華な文様と化してしまふ描寫である。前の時代の詩には二つの自然が描かれていた。そのうち蕭條の原野をはじめものさびしい空間を爲すものは姿を消し、公讌詩の描く繪のような自然が、より一層精密さを増してこの時代の主役となるのである。この自然は遊仙詩・招隱詩、後には謝靈運らの山水詩の中に、俗界とは隔絶した美しく清淨なものとして憧憬をこめて描かれる。この自然とともに語られるべき感慨は、本来別離の悲哀ではなく、脱俗の願ひなのである。末尾に「白首まで歸する所を同じうせん」と述べるのも、このような自然を鑑賞し、俗を離

れて自然の中へ歸りたいと願う心を、いつまでも持ち続けようというのではないか。「努力して明德を崇くせよ、皓首 以て期と爲さん」〔與蘇武「其三」〕と友情の永續を願う古詩の感情表現と、理想の地を描く絢爛たる自然描寫とが結び付いた、この時期獨特の別れの詩ということができるだろう。

この作品は西晋から宋代、別れの詩に一定の型がなく、別離が詩の主要な主題となり得なかつた理由を、明らかにするものではないだろうか。その最大の原因は、恐らく自然の見方・描き方にあるのである。例えば陸機（二六二—三〇三）「赴洛道中作」其一には、故郷の親しい人々と別れ、都へ赴く旅をうたつて次のような句がみえる。

永歎遵北渚

永歎して北渚に遵い

遺思結南津

思いを遺して南津に結ぶ

行行遂已遠

行き行きて遂に已に遠く

野途曠無人

野途は曠しくして人無し

山澤紛紜餘

山澤 紛として紜餘たり

林薄杳阡眠

林薄 杳として阡眠たり

虎嘯深谷底

虎は深谷の底に嘯き

雞鳴高樹巔

雞は高樹の巔に鳴く

哀風中夜流

哀風 中夜に流れ

孤獸更我前

孤獸 我が前を更

ここには王粲・曹植・阮籍につらなる無人の曠野が姿を見せる。これは先にあげた曹植「送應氏」其一の「中野」とは異なり、旅行く者がその眼で望み、別離の悲哀を痛切に感じ取っている景である。しかしこの曠野は、前後を整った對句に挟まれ、窮屈なものに見えるのである。「歎息しつづつ北の渚を進んでいくが、思ひは南の渡し場に遺し

たままである」。この詩ではこの一對の叙述は、故郷吳郡より北の洛陽へと進む旅の経路に合致している。だが一般にそのような事情に關わりなく、南と北あるいは朝と夕、遠く隔つたもの同士を對にすることは、この頃の自然の描寫に好んで用いられる手法である。ここにあるのはそうすることで、言語の美はより大いなるものになるという意識だが、これでは一つの風景を結ばず、旅の経過の記述としても、理に落ちて現實味の乏しいものになってしまう。

山・林を對にする二句は、山や濕地は入り亂れ、うねうねと曲がりくねっている、林や茂みは奥が知れないほど生い茂っていると述べる。人里離れた自然のありさまであるが、ここには無人の曠野とは相反する充滿感を感じられる。先に見た潘岳の詩にも「迴谿縈曲阻」とあつたように、はてしなく曲がりくねっていること、また多くの峰や茂みが重なり合っていることは、當時の最も一般的な山川の描寫である。これは「金谷集作」の他の詩句が、華麗な事物を大量に書き列ねたのと同様、ものたくさんある状態で自然を描こうとする描寫であり、ここに現れているものは、漢賦以來の事物中心の自然觀、空間に意味を認めない充滿の自然觀である。「山澤」「林薄」という事物を描こうとすれば、必ずそれらがたくさんあることを述べてしまう。それらを用いて、無人の曠野のがらんとした廣がりを描き出すことはできないのである。

空間に意味を認めない意識は、自然を風景として見ることを許さない。このころまだ人間の眼は、landscape or sceneryとしての風景を見てはいなかった。だからこそ南と北、朝と夕を一つに合わせて描くことに矛盾を感じなかつたのである。風景の不在は、對句單位で視點が異なり、一貫しない描寫にも現れている。續いて「虎・雞」の對を

加え、作者が實際に體驗したはずの旅の景は、ますます實景から遠ざかつていくのである。

この詩は孫楚・潘岳と同じ時代の作ではあるが、過ぎ去る時間にま  
ったく言及していない。それは作者が使い古された表現では飽き足ら  
ず、自分の思いをより生彩ある形でうたおうとしているからといって  
よいだろう。その主要な手段が寂しい旅中の景物を描くことであり、  
意圖するところは唐詩とほぼ同じである。しかしこの時代の自然觀及  
び描法は、作者の意欲に答えることができないのである。

西晋から宋へ、別れの詩はその情緒を自然の描寫を中心にすえて表  
わすことを諦め、様々の表現を試みる。親しかった交わりの回顧、送  
別の宴の盛んなありさま、旅の無事を祈る言葉などが次々に、故事を  
多用し對句を整えて列ねられる。中には、

來晨無定端 來晨は定まれる端無く

別暑有成速 別暑は速を成すこと有り(謝瞻「王撫軍庾西陽集別」)

「いつ會えるかわからないのに、別れの時は迫っている」、このよう  
な言葉もまだ隨所に見られるが、もはやかつての哀切さはない。時間  
に對する耐え難いまでの悲しみはうすれ、一方では空間を、まだ意味  
のない隙間と見るために、別離の悲哀を訴えるに足る風景が描けない。  
この時代の別れの詩は、表現の核を見失っている。中には別離の感慨  
を次のような言葉で述べるものもある。

豈伊川途念 豈に伊れ川途の念のみならんや

宿心愧將別 宿心 將に別れんとするに愧ず

彼美丘園道 彼の丘園の道を美し

唱焉傷薄劣 唱焉として薄劣を傷む(謝靈運「九日從宋公戲馬臺集

送孔令」)

「私はただ水路に隔てられる別れを悲しむのみではない。官を退い  
て田園へ歸って行くあなたが羨しく、長年の願いを果たせない自分を  
恥じ入るのだ」。このように別離に際して隱棲の希望を述べ、  
同じ送別の宴で作られた謝瞻の詩、謝靈運「鄰里相送至方山」などが  
ある。隱棲の願いはこの頃の詩の主要な主題であり、別離もまたその  
思いを導き出さずにはおかないという點では、古詩における推移の悲  
哀に等しいともいえるだろう。しかしこのような作品も、この時代の  
離別詩を代表するといふことはできない。多種多様な作品が作られた  
というばかりでなく、一つ一つの詩の中でも、對句單位で様々な表現  
が試みられ、まとまりを缺いているというのがこの時代の離別詩なの  
である。

#### 四

別れの詩の制作數が増え、またそこに風景が明らかに姿を現わすの  
は鮑照(四二二-四六六)からである。

落日川落寒 落日 川落寒く

愁雲繞天起 愁雲 天を繞って起る(贈傅都曹別)

高塘宿寒霧 高塘 寒霧を宿し

平野起秋塵 平野 秋塵を起す(送盛侍郎餞侯亭)

風起洲落寒 風起って洲落寒く

雲上日無輝 雲上って日に輝無し

連山眇煙霧 連山 煙霧眇かに

長波迴難依 長波 迴かにして依り難し(吳興黃浦亭庾中郎別)

沈みゆく陽の光に照らされた渚、霧に包まれて聳える城、これらはいかにも友との別れにふさわしい景である。鮑照の描く自然には、しばしば寒々とした風が吹き、霧が彼方を覆ませて却って視線を遠く導く。先の陸機「赴洛道中」にも、「哀風中夜流」という句があった。

しかしこの風は對句單位の描法に遮られ、野途・山澤・林薄までは及んでいない。他には「上潯陽還都道中作」など、一般に鮑照の描く自然は對句の壁を超え、一貫性のある風景を捉えている。それは風や波の運動によって奥行きを生じ、「煙霧」によって大きな廣がりを得た自然である。潘岳「金谷集作」には、このように激しく動くもの、遠くをぼんやりと朧げにするものは存在しなかった。それらは事物をできるだけ光輝ある姿で捉えようとするとは、異質の描寫だったのである。

鮑照はすでに事物中心の自然觀を、かなりの程度免れている。鮑照の眼は事物の周圍に價值ある餘白を見、自然を landscape として望んでいる。自然をこのように捉えていること、またそこに別離の悲哀が自ら溢れていることでは、鮑照の詩句はまさに唐詩に等しい。しかし問題は、悲哀がこの風景に集中してこないということである。「吳興黃浦亭庾中郎別」は、先にあげた「風起洲渚寒」の素晴らしい四句で始まりながら、さらに次のような大量の詩句を列ねている。

旅雁方南過 旅雁 方に南に過ぎ  
浮客未西歸 浮客 未だ西に歸らず  
已經江海別 已に江海の別を経て  
復與親眷違 復た親眷と違ふ  
奔景易有窮 奔景は窮り有り易く  
離袖安可揮 離袖は安ぞ揮う可けん

別れの詩の時間と空間

懽觴爲悲酌 懽觴は悲酌と爲り  
歌服成泣衣 歌服は泣衣と成る  
溫念終不渝 溫念 終に渝らず  
藻志遠存追 藻志 遠く存追す  
役人多牽滯 人に役せらるるは牽滯多く  
願路慙奮飛 路を願みて奮飛に慙つ

味心附遠翰 味心 遠翰に附し  
炯言藏佩章 炯言 佩章に藏す

ここには實に様々のことが述べられているが、前半には古詩の表現に六朝風の洗練を加えた句が多い。「旅雁方南過」と旅行く者を飛ぶ鳥に喩えること、「懽觴爲悲酌」と觴を據り所に悲しみを述べることは、李陵・蘇武の詩と傳えられるものをはじめ隨所に見られる。「奔景易有窮」というのも、意味するところは「與蘇武」其一の「離別在須臾」と同じといつてよいだろう。これに對し後の六句は、自らは遜り、別離の相手を稱えつつ變らぬ友情をうたうもので、西晋以降の離別詩にしばしば見られる手法である。このように別離の悲哀の様々な表現パターンを、對句を整え書き列ねるといふ描法はまだ從來の別れの詩のものである。このような言葉を重ねるほど、冒頭四句の悲しみからは遠ざかり、風吹きわたる洲渚・連山の風景も、宴の途中に窓からちらりと眺めただけのもののように、作品全體から切離されてしまふのである。中には比較的短篇でまとまりのよいものもあるが、概して鮑照の離別詩には、表現の焦點がまだ定まらなかつた時代の弊があり、風景の大きさが生かされていない。

それに對し、一つの風景が作品全體の背景となり、そこに漂う悲哀の情が全篇を蔽うものとなるのは、謝朓（四六四～四九〇）からである。

新亭渚別范零陵雲 謝朓

洞庭張樂地 洞庭 樂を張るの地

瀟湘帝子遊 瀟湘 帝子 遊ぶ

雲去蒼梧野 雲は去る 蒼梧の野

水還江漢流 水は還る 江漢の流れ

停驂我悵望 驂を停めて 我 悵望し

輟棹夷猶 棹を輟めて 子 夷猶す

廣平聽方籍 廣平のごと 聽え 方に籍かんと

茂陵將見求 茂陵のごと將に求められんとす

心事俱已矣 心事 俱に已ぬるか

江上徒離憂 江上 徒に憂いに離うのみ

范雲の旅の目的地零陵は、湘水の主流にある。「君がこれから旅していく洞庭の野は、かつて黃帝が咸池の樂を奏したといわれるところ、瀟湘二水のはとりは、堯帝の二人の娘が舜に従って遊んだと伝えられる土地である」と述べる二つの句は、聖王の傳説を借りて友人の旅中の景を思い描く。太古の平和を懐しんでも、この句にはそれにひきかえ現在は、と時の流れに悪意を感じるところはない。太古へとつらなる大きな時間の廣がりの中に作者は心を遊ばせる。そしてその廣がり、次の句「蒼梧野」というこれも舜帝ゆかりの地名に受け取られ、そっくりそのまま空間の廣がりへとすり變わる。つまり一・二句は三句のための助走の役割を果たしているのであり、はてしない廣がりを得た空間の中を、友は雲に喩えられて去っていく。次の「水還江漢流」は、作者自身がとどまるのに喩えるともいわれ、君は去っても零陵の水は、江漢の流れとなつて還ってくるとも解釋されている。だが、いずれにせよ「雲去」「水還」と對を作つて描かれる大河は、これま

での句で描かれた茫大な時間と空間の中を還流してやまないもののように感じられる。李白「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」には、「孤帆の遠影碧空に盡き、唯だ見る 長江の天際に流るるを」という句があった。友の乗る舟がしだいに遠ざかり、ついに視界から消え去った。その瞬間に、世界の限りない大きさを感じた、という描寫である。このようにある一つの方向へ直線的に進むことで出現する無限もあるが、循環してやまないことによつて現れる無限もある。しかし李白の詩も、謝朓の詩も友との別れを限りなく大きな空間の中でのものと捉え、その描寫によつて別離の情を表現しようとするのでは同じなのである。この詩にも、別れの詩がまだ確かな方向を見出せなかつた時代の名残りはある。君は廣平の太守のように、名聲が廣まることであらう、それに對し自分は、司馬相如のように死後に文章を求められるくらいのものだ、と嘆く部分である。嚴羽が『滄浪詩話』考證篇に「道の一聯を刪り去り、只だ八句を用てすれば、方に渾然たり」と述べているように、この二句はこの詩の中で異質なものに感じられる。しかし先の鮑照の詩では、叙景四句が浮き上がっていたのに比べれば、これは大きな進歩であらう。この部分を取り去れば、景の中に流れる情緒はますます全體に浸透し、まさに「全篇、唐人に似たるもの」となるのである。他には「離夜」「臨溪送別」など、謝朓の描く別離の景は鮑照に比べやや優美にすぎるものの、そこに感じられる限りのものに對する志向と、別離の憂いが景に集中する度合の強さとは、六朝の後輩詩人たちよりもまさるものがあるのではないかと思われる。

五

齊以降別れの詩は急速に増加した。中には『古詩源』など後世の選

集に採録され、各詩人の代表作となつてゐるものも数多い。風景の描寫はしだいに萬人のものとなり、まだ唐詩のような大ききはないもの、別離を明らかに空間の中のものとして描き出している。それに對しもう一つ注目されるのは、時間の無情な経過を嘆く古詩型の詩が、前の時代よりもむしろ増えていることである。

洛陽城東西 洛陽城の東西に

長作經時別 長く時を経る別れを作せり

昔去雪如花 昔去るとき雪花の如くなりしに

今來花似雪 今來たれば花は雪に似たり（范雲「別詩」）

他には范雲「送別」、沈約「送別友人」、江淹「古離別」などが同様のものである。これらは恐らく民歌風と意識して作られ、そこにあら新しさを加えることに、創作の喜びを感じてゐるものだろう。これはいわば時間の悲哀を弄んでゐることではないか。このような詩が生れるのも、時間が人間を苦しめる力をほぼ完全に失つてゐるからである。人間はこの頃自分自身を、時間の中よりも空間の中に生きる者として、より強く意識し始めたのではないだろうか。唐詩の第一歩は、恐らくこの意識の變化にあるのである。

西晋より宋代には、「別詩」「送別」「送友人」などという詩題自體が稀だったが、このような短篇の離別詩が増加する一方で、まだ一般に別れる相手を詩題に記す作品は、對句單位で様々な悲哀の表現を列擧するという形を残している。松浦友久氏が述べてゐるように、唐代離別詩を代表する李白・王維らの作品は、誰と何處で、どんな事情で別れるというのでもない、普遍的・抽象的描寫のものである。初めにあげた高適「別董大」にしても、その詩句には董大に關わる特殊な事情の記述はない。だがこのように個別性を缺いた離別詩は、六朝後期

の「別詩」「送別友人」などを繼承するものといえるだろうか。これは確かに普遍的描寫のものではあるが、その多くは過ぎ去る時間を嘆くことでその悲哀を述べてゐる。唐詩へつながらる情景をもち、しかも對者への個別性を缺いてゐるものは、謝朓「臨溪送別」、何遜「相送」などむしろわずかなのである。

唐代の普遍的離別詩は、別れる相手に密着し、一つ一つの特徴な別れを描く中からしだいに成長してきたものと思われる。潘岳・謝靈運らの離別詩にも別れる土地の描寫はあつた。この描寫は個別の事情の一つとして始まり、自然が文様から風景へと變化し、別離の悲哀にふさわしい姿となるにつれ、しだいに別れの詩の主役の座を求め始めるのである。鮑照は、自分の描いた風景が何を表現しているか、まだ自覺できなかった。謝朓にもその自覺は十分でなかつた。彼らの描いた風景は、別離の思いを餘すところなく表現してゐたが、個別に對するこだわりが、その詩に様々の餘分なものを持ち込んでくるのである。叙景以外の要素を切捨てること、その景をより廣大なものにすると同時に、様々な情景を描き分ける力を蓄へること、六朝後期から唐へ向け、別れの詩の努力はここにあつたといつてよい。

こうして到達した唐代離別詩の典型は、人間は憂愁に満ちた後姿ばかりで顔も見えず、風景は、最小限度遠近感を表わす線のみでこの土地とも知れない、ただ「限らない空間の中での別れ」にまで抽象度を高めているのである。しかし唐詩は旺盛な創造力をもつてゐる。離別詩の歩みをこままでたどつてきた眼には、典型の完成とほぼ同時に始まる新しい模索は驚きをもつてうつる。それは「空間の中での別れ」の詩に、再び時間を導入することである。

六

送魏二 王昌齡

醉別江樓橘柚香 醉うて江樓に別れば橘柚香し

江風引雨入舟涼 江風 雨を引いて 舟に入りて涼し

憶君遙在瀟湘月 ……………

愁聽清猿夢裏長 ……………

この詩の後半二句についてはいくつかの異なる解釋がある。「遙在」以下の主語を、作者王昌齡とみるか、あるいは送られる魏二とみるか、さらに「憶」の語をどう解釋するかによる違いである。つまり「君と別れた後、私は瀟湘の水を照らす月の下で、清らかな猿の聲を聞きつつ君を憶うであろう」と解くか、「月に照らされ、猿の聲に耳を澄ます君を、憶うであろう」と解くか、それとも憶うのは別のことかである。

しかしこの問題についてはここでは立ち入らない。いずれの説によるにしても、一・二句が別離の景を描くのに対し、三・四句は別れた後のことである點は一致する。別れの詩に再び時間が流れ始めたのである。この詩も前半二つの句は、空間の中での別れを描いている。ただ李白・王維ら典型的離別詩の空間が、主に視覚で捉えられていたのに対し、この空間は、送別の宴の醉に心地よい橘柚の香り、舟に吹き込む雨足の涼しさと、まず嗅覚・觸覚によって感得され、風に導かれて大きく広がっていく。このような空間表現そのものが、一つの新しい試みであった。しかしこの詩の別離の情は、このような空間の中にさえも落着いてはいられない。「別れた後も私は君を思うだろう」と、時間の中へ流れ込んでいくのである。古詩の中には別後に關心を寄せ

る言葉はしばしば見られた。

惟念當離別 惟だ念う 離別に當り

恩情日以新 恩情 日に以て新たならんことを(蘇武「詩」其二)

努力愛春華 努力して春華を愛し

莫忘歡樂時 歡樂の時を忘るる莫れ(蘇武「詩」其三)

これらの詩句から感じられる時間は、すべてのものを變化させ、二人の友情も楽しかった思い出も、日々無残に破壊していくものであり、だからこそ「三載も千秋」「與蘇武」其二と感じられるほど辛く悲しい時間である。だが王昌齡の詩の中には、このような時間は流れていない。「遙在瀟湘月」「清猿夢裏長」、どちらが身を置いているにせよ、このような背景の中で、作者は友への思いをうたう。この詩の作者は別れた後の友情に、何らの不安も感じていない。古詩が「衣帶は日に已に緩む」(古詩十九首「其一」)と嘆いたのに対し、友と會えない刻一刻に苦痛を感じているのではない。これはこの詩に描かれる別れが、このようなものだったというのではない。別れた後も流れ続ける時間を想起して、こんなにも平靜に悲しみにひたるといふことは、古詩にはあり得なかつたのである。

六朝の離別詩にも、別れた後のことを述べて大きな苦痛のないものはあった。先にあげた鮑照の詩に「溫念終不渝、藻志遠存追」とあり、謝朓の詩に「廣平聽方籍、茂陵將見求」とあったように、旅立つ友への餞の言葉がそれである。このような言葉は、別れる相手を明記する詩に數多く見られ、唐詩の中にも少なくない。

鄭國遊人未及家 鄭國の遊人未だ家に及ばず

洛陽行子空歎息 洛陽の行子空しく歎息す

聞道故林相識多

聞道きくち 故林 相識多しと

罷官昨日今如何

官を罷きむるは昨日 今如何(李頎「送陳章甫」)

「君はまた故郷に歸りつかないだろうか。國には友人が多いと聞くが、官を辭めたばかりの今、心境は如何だろうか。國には友人が多いと聞く役目を得て旅立つ友への壯行の言葉だったのに對し、ここでは官を辭めて歸國する友への言葉である。しかしこれらは友への心遣いの中で、

別後のことに及ぶという點では同じである。王維「送別」に「君は言う 意を得ず、南山の陘に歸臥すと」とあるように、志を遂げず故國へ歸る者を送る詩は、唐代離別詩の中に一つの部分を占めており、そこにはしばしばこのような形での別後への言及が見られるのである。<sup>(2)</sup> それに對し「送魏二」の作者には、友の未來を案ずる様子は見られない。後半二句が描くのも、友の別後の姿ではなく、月に照らされ清らかな猿の聲が響く、ある「時」なのである。このような描寫は唐詩が風景を描く手法とどこか似てはいないだろうか。松浦友久氏は、王昌齡の著名な離別詩には、別離の時點を描くのみにとどまらない二元

的あるいは複合的な時間構成のものが多く、同様のものは李白・王維にもあると述べている。氏のあげる例の中から別後の描寫を見てみよう。

武陵溪口駐扁舟

武陵溪口に扁舟を駐とどめれば

溪水隨君向北流

溪水 君に隨いて北に向つて流る

行到荊門上三峽

行きて荊門に到りて三峽を上らば

莫將孤月對猿愁

孤月を將つて猿愁に對せしむる莫れ(王昌齡「盧溪別入」)

盧溪別入

寒江綠水楚雲深

寒江 綠水 楚雲深し

別れの詩の時間と空間

莫道離憂遷遠心

道う莫れ 憂いに離りて遠心を遷すと

曉夕隻帆歸鄂渚

曉夕 隻帆 鄂渚に歸らば

愁將孤月夢中尋

愁いて孤月を將つて夢中に尋ねよ(王昌齡「送人歸江夏」)

人歸江夏

初めにあげた高適・王維の離別詩では、日を翳らせて十里四方も廣がる黃雲、夕暮にねぐらへ歸る鳥などを配した風景が、別離の情緒をうたい上げていた。それと同じくこの別後の敘述の中でも、三峽の空にかかる月、朝夕の光の中をすべる一艘の舟などが、時間に様々な色合を與え、その中の別離の思いを描き分けているのではないだろうか。過ぎ去ることがもはや苦痛でなくなった時間は、別離の悲哀の新しい舞臺なのである。

別離を起點に詩の中を流れ出す時間、別離の思いをゆっくりと味わい直すような時間は唐代に始まる。六朝期にも、單に餞の言葉にとどまらない別後の描寫を目標するものはあった。しかしそこには、別離の情緒の新しい廣がりを感じることはできないのである。

春草似青袍

春草は青袍に似て

秋月如團扇

秋月は團扇の如し

三五出重雲

三五 重雲を出づれば

當知我憶君

當に知るべし我が君を憶うを

妻妾若被逐

妻妾として逐に被るが若きも

懷抱不相聞

懷抱は相聞せず(何遜「與蘇九德別」)

「合歡の扇のように丸い月が雲を出たら、君を思う私の心を知ってほしい。春になって草が茂っても、君がああ王孫のように歸つて來ないとき、私はこの草のような色の君の上着を思っているだろう」。別れた後に、どのような状況で友を思うかを描いていることでは、この

詩は先の王昌齡の三つの詩と同じである。しかしここでは雲を出る月道を蔽う春草も、ただ別離にゆかりの事物というだけで、友を思いつつ望む情景としてはリアルさもなく魅力もない。別離の思ひは、これでは別後の時間の中へ流れ込んでいかないのである。

この新しい時間の描寫は、空間描寫の技術の進歩とある種の徹底、つまりあらゆる事物と人間の行爲が、空間の中のものとして描かれた後に、初めて可能になったものではないだろうか。同じく『楚辭』招隱士の詩句を用いながら、先の詩と次の詩の違いは明らかである。

送別 王維

山中相送罷 山中 相送り罷み

日暮掩柴扉 日暮 柴扉を掩う

春草明年綠 春草 明年綠なるも

王孫歸不歸 王孫 歸るや歸らざるや

この詩では簡明な言葉の中に、小さな庵のある山中の情景が鮮明に浮かび上がってくる。前二句ですでに空間は確固として構築され、「明年綠」とのみ描かれる春草も、この山中の土を蔽って生い茂るものとなる。別れた後も流れる時間を讀者が體驗できるのは、この生き生きとした草の綠によってなのである。

では時間を導入することで、別離の悲哀の表現にはいったい何が加わるのだろうか。この詩では、時間は日暮れて柴の戸を閉ざす別離から、草萌える春へと流れていく。愁いの中へ自ら閉じこもるような静けさから、春の喜びへ、新しい生命の季節へと向かう時間の中で、作者は別れた友を思う。ここには従來の離別詩にはみられない新鮮なものが感じられる。そのことを考えてみるために次の詩と比較してみよう。これまでも度々觸れたが、唐代離別詩の典型の一つであるこの

作からは、様々な問題が考えられるのである。

黃鶴樓送孟浩然之廣陵 李白

故人西辭黃鶴樓 故人 西のかた黃鶴樓を辭し

煙花三月下揚州 煙花三月 揚州に下る

孤帆遠影碧空盡 孤帆の遠影 碧空に盡き

唯見長江天際流 唯だ見る 長江の天際に流るるを

この詩は、一面の花と霞とに包まれた春三月、揚州という繁華な都へ下っていくという華やかさが、三・四句の寂寥を一層大きく膨ませていた。華やかなものから寂寥へという流れは、空間の詩の中でも大きな効果を上げていた。しかしその逆の経路で、別離の悲哀をうたうことは、ただその時の情景の中だけでは恐らく不可能ではないだろうか。王維の詩の情緒は、時間を加えることによって初めて表現できたのではないかと思えるのである。

古詩から唐詩まで、別離の詩の變化をたどって明らかになったのは、ある時代の悲哀の表現様式は、その時代の時間・空間に對する意識と深く結びついているということであった。別離の悲哀は、直線的・不可逆的に流れてやまない時間から、空間の中へ、さらに異なる様相をもった時間の中へと表現の場を擴大していく。古詩の中では、別後は常に決定的な變質をこうむり、「今」との間に落差を生む。それゆえに時間は方向をもち、固くまっすぐなのである。それに對し王昌齡・王維の詩の中では、時間は可塑性をもって見える。その流れは自在に切り取られ、友を思う心の中では、來年の春や月に照らされたある時に形づくられた唐詩の基本的な骨組みは、空間を描き分けることによつて、多彩な感慨をうたうことであつた。この新しい時間がそこにど

のような變化をもたらずか、どんな表現の可能性を切り開いていくかが注目されるのである。

(1) 以下に述べる古詩と唐詩の悲哀の表現、及びその自然描寫の違ひについては、拙論「漢魏六朝詩における空間表現の形式とその變化」(東京大學東洋文化研究所紀要 第百二冊、一九八七年、以下「拙論」と略す)第二章及び結語参照。なお以下に引用する傅季陵・蘇武の詩の詩題及び配列順は『文選』による。その成立時期は、後漢後期と考えるものとす。

(2) 拙論結語に述べたように、漢から唐への詩の歩みの中で、夕陽は時の短促を象徴するものから、しだいに一つの風景として望まれるものへと變化していった。唐の夕陽は風景として多様な描寫を施されるものではあるが、流れゆく時間に對する連想を喚起するものでもあったと思われる。

(3) 小南一郎「楚辭の時間意識—九歌から離騷へ—」(東方學報58、一九八六年)。

(4) 吉川幸次郎「推移の悲哀」、『吉川幸次郎全集』第六卷所收(筑摩書房、一九六八年)。

(5) この詩の最後より二句目「念我平常居」は、『文選』による。宋本「曹子建集」は「平生居」と作る。一方『古詩紀』には「一作平生親」とあり、以後の古詩選本の多くはこれを採用している。詩題との接點を求めるための改竄であろう。だがこのように變更しても、一篇の主題が洛陽の荒廢を嘆くものであることは變わらない。なお「曹集餘評」などいくつかの書は「五臣本『文選』は「平生親」と作る」と述べている。しかし六臣注本には「平常」の後に「五臣作生」とあり、さらに「濟曰、言思念平生遊居之處、所盡成丘墟」とあるところからすれば、「平生居」であったと考えるべきだろう。

## 別れの詩の時間と空間

(6) 建安詩の描く自然には、空間を形成するもの寂しい風景と、美しく平面的なもの二つがあり、後者が西晋以降の詩へつながっていく。詳しくは拙論五章参照。建安・正始の詩と唐詩の空間に對する意識の違ひについては拙論四章四節参照。

(7) 王粲・阮籍の詩の中でも、風景の描寫は別離の悲哀と結びついている。拙論三章三節に述べたように、王粲の詩は様々な寂寥の風景を描いている。しかしそれらはみな「七哀」「從軍」に見られるもので、友人との別離に際して作られた「贈蔡子篤」「贈士孫文始」「贈文叔良」には風景の描寫は見出せない。「贈蔡子篤」にはわずかに「舫舟翩翩、以沂大江、蔚矣荒塗、時行靡通」という句が見える。しかしこの詩は友と遠く離れたことを「濟岱江衡、遶焉異處」と述べており、この概念的な表現は「與蘇武」の「各在天一隅」と同じである。また續けて「風流雲散、一別如雨」という詩句があり、これも同じく「與蘇武」の「浮雲」の句と同様、別離を時の移り變わりの中で捉えるものといえることができる。翩翩たる舫舟の描寫も、別離の景というよりも、「七哀」「從軍」と同じく後漢末の世界とそこに生きる者の姿というべきだろう。

阮籍「詠懷」は、其二・七・二〇・二七・五一などが別離に言及しているが、これらは友や故郷との別れに際してその悲しみを述べるものではなく、阮籍には一般的な意味での別離詩といえるものはない。別離の語は「願爲三春遊、朝陽忽蹉跎、盛衰在須臾、離別將如何」(其二七)のように、時はたちまちに移り萬物は變化する、という文脈の中で現れるものが殆どである。つまり阮籍にとつての別離とは、すみやかな心變わりと同義であり、空間的な乖離とは捉えられていない。

(8) 西晋詩の自然描寫とその背後にある自然觀については拙論五章参照。

(9) 以下に續けて述べるように、南北・朝夕・山水など相反するもの同士を對にすること、對句單位で視點の異なる描寫、山川を曲がりくねった姿で描き餘白を埋め盡す描法は、西晋より宋代山水詩に至る自然描寫の

- 特徴である。實例など詳しくは拙論五章及び七章一・二節参照。故郷を離れる陸機の詩の中にも、他に「南望泣玄渚、北邁涉長林」(「赴洛」其一)、「夕息抱影寐、朝徂銜思往」(「赴洛道中」其二)の例がある。
- (10) 漢賦の自然觀について詳しくは拙論一章参照。
- (11) 小川環樹氏は、「風景」という語は六朝の文獻の中で light and atmosphere の意で用ゐられ、landscape or scenery の意に變つてくるのは唐代中期からであると述べている(「中國文學における風景の意義」『風と雲』所收、朝日新聞社、一九七二年)。拙論七章三節はこの見解に基つき、六朝の「風景」描寫について考察した。
- (12) 注7に述べた「贈蔡子篤」など王粲のいくつかの詩は、別離の感慨を多様に表現することで、西晋・宋型の離別詩の早い例ではないかと思われる。
- (13) 建安・正始の恐るべき空間とは異なる新しい空間の發見とその描寫は、注11に述べた六朝の「風景」の描寫から始まったものと思われる。詳しくは拙論七章三節、八章一・二節参照。
- (14) 鳥を用いるのは「黃鶴一遠別、千里顧徘徊」(蘇武「詩」其二)、「願爲雙鴻鶴、奮翅起高飛」(「古詩十九首」其五)、「願爲比翼鳥、施翮起高翔」(曹植「送應氏」其二)など。酒と鶴を用いるのは「我有一尊酒、欲以贈遠人」(蘇武「詩」其二)、「獨有盈觴酒、與子結綢繆」(「與蘇武」其二)、「賓飲不盡觴、愛至望苦深」(曹植「送應氏」其二)など。
- (15) 「文選集評」引「文選集成」に「上句喻范去、下句喻已留」とあり、この説をとるものに、内田泉之助・網昉次「文選」詩篇上の注(明治書院 新釋漢文大系14、一九六三年)、花房英樹「文選」三の注(集英社 全釋漢文大系28、一九七四年)がある。他の多くの注釋は作者自身の喩えとはせず、水は都あるいは海へ還ると述べる。
- (16) 嚴羽『滄浪詩話』詩評篇に、「謝朓之詩、已有全篇似唐人者、當觀其集方知之」とある。
- (17) 鮑照の描く自然には煙霧の景が多く、「洲・渚」の語が多く用いられている點では、當時の一般的な自然描寫と共通する(小西昇氏によれば「洲・渚」が多用されるのは謝靈運からであるという。「謝靈運山水詩考」一、福岡教育大學紀要 第一部文科篇26、一九七六年)。しかし寒風吹きすさび、波の走る激しさは他に類のないものがあり、これは阮籍・陶淵明の流れを汲むものではないかと思われる(拙論六章一節参照)。
- (18) 『楚辭』以來、秋と夕暮は過ぎ去る時間の悲しみを最も痛切に感じさせるものとして描かれてきた。この堅固なパターンに變化が生じ、秋や夕暮を描いても悲しくないものが現れるのは陶淵明・謝靈運のころからである(拙論結語参照)。また「惜春」の心情が「一首全體の表現の中心として」うたわれるようになるのは、六朝後期からであるという松浦友久氏の指摘(「中國古典詩における『春』と『秋』」、東方學 第六十七輯、一九八五年)も、時間に對する意識の變化と關わりをもつものと思われる。
- (19) 松浦友久『李白研究—抒情の構造—』第三章「李白における別れのうた」(三省堂、一九七六年)。なお別離の相手の名は、後世の編者が書き加えた可能性もあるが、一般に六朝後期の離別詩では、詩題が普遍的か個別的かによって、内容にも本文に述べたような違いがある。
- (20) この問題について詳しく考證したのは次の論稿である。松浦友久「憶君遙在瀟湘月—離別詩における時間の表現—」『詩語の諸相』所收、研文出版、一九八一年。松浦氏の結論は、「憶」の字が單なる未來への想像の意で用いられている例は殆ど見當らず、その内容は過去に關わるものとして解釋すべきであるとして「憶君」と「遙在」以下を切離す。つまり二句の解釋は「やがて別後に君を憶い起すとき、君は瀟湘の月を仰ぎつつ、猿の聲に耳を澄しているであらう」となる。
- (21) 王昌齡「芙蓉樓送辛漸」にある著名な句「洛陽親友如相問、一片冰心在玉壺」は、失意の友を思いやるというパターンを踏まえつつ、思いや

られる側から今の心境を述べたものといえるだろう。作者はこのとき江寧の丞という地位にあり、それは作者にとって不本意なものであったと考えられるからである。この時も別後のある時点を設定しているが、この別後は「送魏二」のように別離の憂いを引き延して味わうようなものではない。しかし時間を自在に扱っているという点では、やはり新しい時間意識をうかがわせるものといえることができるだろう。

(22) 注20にあげた論稿による。

(23) この「黄雲」については水谷誠「十里黄雲白日曛——黄雲ノート」(中京大學教養論叢26、一九八五年)に詳しい。

(24) 作者自身の状況か、友のものかの違いはあるが、時間を描き分けることでは同じである。作者自身の體驗する別後を描くものには、王昌齡「送張四」がある。

(25) 何遜の時のこの部分に用いられているのは、「青袍似春草、長條隨風舒」(『玉臺新詠』卷一「古詩」五首之一)、「裁成合歌扇、團圓似明月」(班婕妤「怨歌行」)、「王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋」(「楚辭」招隱士)。